

## 平田篤胤の『古道大意』の形成と刊行

はじめに

一九世紀前期、篤胤は江戸で国学運動に努め、世間に向けて諸道の講釈を行った。最初の講釈は『古道大意』であった。国学の総論ともいべき重要な講説がなされたのである。これまで、村岡典嗣<sup>①</sup>、田原嗣郎<sup>②</sup>、子安宣邦<sup>③</sup>の研究書においても、『古道大意』は、篤胤の初期の段階の重要な著述としてしばしば言及されてきた。しかし、戦前戦後に数度刊行された平田篤胤全集本（底本は版本）を無批判に利用しているのみで、版本以前の写本の調査はなされていない。また、『古道大意』の刊行の経緯についてもまった

く検討されていないのである。要するに、『古道大意』は篤胤の重要な著述であるにもかかわらず、従来の研究では、史料批判が一度も行われたことがないということである。

近年の国学研究では、近世後期から幕末維新时期における平田塾による書籍の出版や、門人による読書の実態にも目が向けられるようになって注目に値しなければならない。先駆的な仕事があったにしても、最近の研究動向は、桂島宣弘<sup>④</sup>にはじまり、宗教学の遠藤潤<sup>⑤</sup>や国文学の吉田麻子<sup>⑦</sup>などによつて進められたものである。但し、篤胤の著述はかなり多く、『古道大意』については必ずしも十分に論じられてはいないように思われる。『古道大意』は、平田における国学総論ともいべきものであることから、平田

中川 和明

国学研究において等閑視することはできないであろう。

また、篤胤没後すなわち幕末維新期における平田篤胤・延胤の国学運動に関しては、主に歴史学的な研究が、宮地正人・田崎哲郎・樋口雄彦・沼田哲・芳賀登などによって進められてきた。これらの成果を継承することで、篤胤没後から明治初期に及ぶ平田国学の歴史的展開を見通す必要がある。戦後、日本思想史学による国学思想研究と歴史学の国学運動史研究との乖離状態が、長く続いたのであるが、こうした研究状況を乗り越えるべき時がきているようである。昨年、国立歴史民俗博物館において新史料(平田家資料)による企画展「明治維新と平田国学」が開催されたように、平田国学研究は新しい段階に入ったように思われる。現在整理中であるが、歴博の平田家資料は、一万点を越える膨大な資料群である。これを活用することによって、従来の平田国学像は一新されることになるであろう。本稿では、『古道大意』の形成と刊行に焦点を合わせることで、平田国学の歴史的展開の一断面について再検討してみたいと思う。

## 一 講説家篤胤の登場と「古道大意」講釈

篤胤は寛政七(一七九五)年正月八日、久保田藩を脱藩

して江戸に向かった。江戸遊学の後、同一二年八月に平田家に養子に入って備中松山藩士となり、牛込神楽坂上の本多家屋敷に居住する。この六年弱の遊学の時期に、江戸の学界の様子を具に観察したとみられる。文化元(一八〇四)年に江戸で講筵を開いて、国学運動を開始した。当時の江戸では、さまざまな学派が勢力拡大を競っていたはずである。そうした競争の中に参入して、門人を徐々に増やしていった。

同四(一八〇七)年京橋守山町に転居、さらに翌五年には京橋尾張町に転居した。『大壑君御一代略記』の文化六年の項には、周知の通り、「弘ク古道ノ講説ヲ始メ玉フ。次々儒道仏道オヨビ諸道ノ大意ヲモ講ジ玉フ」とある。篤胤が講筵を開いてから五年後にあたる。傍線部に「弘ク」とあるように、公開講釈を開始したのだ。古道大意が最初の講釈であったことに注目したい。なお、同六年に篤胤は京橋山下町に転居している。

また、『大壑君御一代略記』同八年の項によれば春より始めて、古道大意、俗神道大意、漢学大意、仏道大意、医道大意、歌道大意、玉多須喜などの「講本」が次々になったという。この「講本」は、草稿本を指しているとみられる。従来の研究では、右の「講本」が何を意味しているのかほとんど意識されて来なかった。そのため、この年にこ

これらの講釈本が版本として刊行され、流布したかのような誤解をまねいた。後述するように、実際に版本として刊行されるのは、かなり後になってからである。

但し、『古道大意』の自筆草稿本は秋田県公文書館の稿本類の中になく、国立歴史民俗博物館の平田家資料にも跋文の草稿が一葉残っているのみである（清書本や版本の『古道大意』に跋文は存在しない）。古道大意以外の諸道の講釈本の場合、かなり稿本が残されているのに対して、古道大意は何か事情があったと推測されるのである。ここでは、『古道大意』の特殊性を指摘するにとどめたいと思う。

最近、平田塾による講釈の広告文「御国学講談」(三月一日より)が発見された。記主は「菅能屋先生門人 藤原元良・藤原国守」となっている。年記はないが、菅能屋を称していた時期(文化元(一八〇四)年春―同一三(一八一六)年のものである。これによれば、塾側が夜「手習所」を借りて講釈の場としていたことが明らかとなった。演目は、①古道の大意②仏道の大意③俗神道の大意④儒道の大意⑤歌道の大意⑥医道の大意⑦年中行事の順で記されている。「年中行事」という演目があったことはこの史料によって始めて明らかにされた。篤胤の草稿『徴古歳時記』(国立歴史民俗博物館所蔵)は、この「年中行事」の講釈をもとにして書かれたとみられる。

また、篤胤の講釈には、「表会」と「内会」といった区別がなされていた<sup>17)</sup>。「表会」は、一般に向けたいわば公開講座のようなもので、「内会」は門人に向けた内輪の講釈である。はじめに「表会」で聴衆に興味をもたせておいて、門人にしていくといった方法がとられていたと考えられる。とすれば、先にみた広告文は「外会」の広告ということになるであろう。

なお、篤胤の居所であるが、文化一〇年に京橋南鍋町、さらに同年北八町堀鍛冶町に移った。同一三年春には京橋三十間堀へ転居している。次いで、文政三(一八二〇)年三月五日に湯島天神男坂下へ転居、天保六年一二月根岸新田に移った。このように篤胤は江戸で転居を繰り返しながら、国学運動を続けていたのであった。

## 二 篤胤没後における平田塾の清書本『古道大意』

### 頒布

(1)『著述書写本目錄并筆紙料覚』と『大整平先生著撰書目』の頒布

平田塾では、学派の拡大のために書籍の頒布に力を入れていた。しかし、篤胤の著書を外部への公開度によって区別していたのである。先に述べたことがあるが、行論の都

合上ここでも簡単に触れておくと、篤胤の著書は「内書」「外書」に分けられていたのである。「内書」は写本のままにしておくもので、「外書」は版本にして外部に向けて積極的に発信するものである。しかしながら、平田塾では次々に版本として出版していることからすれば、あまり固定的・静態的にとらえるべきではないであろう。従来の研究では「内書」「外書」の区別をしていないため、『靈能真柱』『古史徴』のような外書と、『仙境異聞』『勝五郎再生記聞』のような内書を同列に扱ってしまったのである。平田塾の出版活動の実態を把握する上で、「内書」「外書」の区別は無視できないといえよう。

また、平田塾では、篤胤の生前から様々な清書本を作成して門人などに頒布していたことが、篤胤書簡によって確認できる。やがて、塾では、「著述書写本目錄并筆紙料覚」という清書本（著述書写本）のリストを作成して門人などに頒布するようになる。こうしたリストを何時から作成していたのかは明確ではないが、管見の限りで最も早いものは、篤胤死没（天保一四年閏九月一日）の二年後、弘化二（一八四五）年四月一五日のものである。門人業合大枝宛に平田篤胤が送付した書簡に添付されたものだ。書目数は二一部である。このリストの最後尾に、古道大意の書名をみるこ

意」が売られていたことがわかるであろう。価格は金一分一朱となっている。

さらに、昨年翻刻紹介された史料に青森県立郷土館所蔵の「著述書写本目錄并筆紙料覚」<sup>22</sup>（安政二（一八五五）年頃）がある。これは先のリストから一〇年後に作成されたものであり、書目数は三六で、先にみた弘化二年のリストよりも多くなっているが、その中に古道大意の書名はみられない。すでに『古道大意』は版本として刊行されていたためであろう。また、高森町歴史資料館所蔵の「著述書写本目錄并筆紙料覚」（安政四（一八五七）年頃と推定されている）の場合、書目や価格の表記は右の青森県立郷土館所蔵のものにほぼ同様である。

ところで、これら「著述書写本目錄并筆紙料覚」の最初に、『著述書目』（内題「大塚平先生著撰書目」）が挙げられている。平田塾の門人は、この書目によって内書・外書の両方の書名を知ることができた。この著述書目では、古道大意について次のような解題が記されている。<sup>23</sup>

古道大意 講釈本 二巻

初学の徒の見ルべき書も無きには非ねど、猶悟りがてなるも多かるを、此書はしも、師の口づから説聞せ給ふを、直に移し記せるなれば、何なる初学の者なりとも、是ばかり心得き物は有ることなし、我が師の門に

入らむ人、必まづ此書を見て、古道の趣を知り弁ふべし（無窮会神習文庫本参照）

右の傍線部のように、篤胤の講釈を直接記録した、といった点を売りにしていたのである。篤胤の声を聞くことができなかった没後の門人にとって、こうした口語体の平易な講釈本はかなり魅力があったと考えられる。

なお、従来の研究では、『著述書目』（大壑平先生著撰書目）は神宮文庫本のみが利用されてきた。しかし、各地に残る諸本を調査してみたところ、【表一】のようになる。内閣文庫本は稿本であり、印記「平田／氏記」とあるように平田家から何らかの事情で外部に流れたものとみられる。国立歴史民俗博物館本は平田神社に伝来したものである。無窮会本は、平田塾が作成した清書本であり、門人に頒布されたものの一つとみられる。外題は種々であるが、平田塾では当初「著述書目」としていたが、後に無窮会本のように「伊吹舎先生著撰書目」とするようになった。他の外題は転写の過程でつけられた可能性が高い。巻首題は「大壑平先生著撰書目」から「気吹舎先生撰書目」に変化したとみられる。本編の書目総数は一一三種であるが、歴博本のみ一一九種となっていて六種多い。歴博本の場合、二丁挿入されているためである。さらに、無窮会本では巻末の「追加」の書目に、「気吹庵」が加えられている。これが

『著述書目』の最終的な形態とみられる。このように、平田塾では『著述書目』の改訂を行っていたのであろう。何れにしても、従来の平田国学研究のように神宮文庫本のみで依拠していたのでは、『著述書目』の変化・発展を把握できないことは明らかであろう。

## (2)清書本『古道大意』の頒布と伝本

それでは、平田塾の清書本『古道大意』は現存しているであろうか。従来の研究では、清書本『古道大意』の存在はまったく知られていなかった。今回、豊橋市中央図書館の羽田八幡宮文庫の中に、平田鍊胤から三河国の門人羽田野敬雄に送付された清書本（下巻のみ現存、上巻欠本）が所蔵されていることを確認した。篤胤没後の翌年に、送付されたものである。奥書には次のようにある。

右古道大意上下両卷平田鍊胤主書写シテ贈オコセ賜ヒツ／天保十五年十一月廿三日到着 羽田塾敬雄（花押）／同門ノ外他見スヘカラズ、

天保一五年（弘化元年）ということ、後に触れるように、これは版本として刊行される以前のものといえる。傍線部によれば、同門以外には「他見」すべきでないと考えたことがわかる。平田塾では、清書本『古道大意』を門人に限定して頒布していたのだ。口語体で記されたこの

【表1】著撰書目(大塚平先生著撰書目)の諸本

No	所蔵	外題	序題	巻目題	梓	写	装訂	法量	冊	題付	序/跋	本種の 書目数	追加 (気吹舎 取文集)	追加 (維新絵 遺前集)	追加 (気吹舎 業前集)	追加 (気吹廬)	印記	請求記号
1	国立公文書館内閣文庫	著述書目(書題巻)	大塚平先生著撰書目	大塚平先生著撰書目	単辺匠 郭	稿本	朝野綴	25.5×18.4	1	序(6), 本文(59)	天保5/ 10年	113	○	○	×	「平田/氏記」,「大日本/帝國/圖書印」,「日本/校付/圖書」,「内閣文庫」	219-75	
2	国会図書館古典籍資料室	気吹舎六人著述日録(打付外題)	大塚平先生著撰書目	大塚平先生著撰書目	無梓	転写本	明朝綴	26.7×18.5	1	序(6), 本文(59)	天保5/ 10年	113	○	○	×	「杉氏/藏書」,「杉氏秘/笈之記」,「孝珍」,「江戸四日市/古今珍書館/建館五」,「昭和15年3月28日帝國図書館購入印	848-156	
3	神宮文庫	著述書目集(書題巻)	大塚平先生著撰書目	大塚平先生著撰書目	再辺匠 郭	清書本 カ	不詳	不詳	1	序(6), 本文(59)	天保5/ 10年	113	○	○	×	不詳	各省至「平田鶴胤の著述書目」参照	
4	都立中央図書館特別文庫室加賀文庫	気吹舎先生著撰書目(書題巻)	大塚平先生著撰書目	大塚平先生著撰書目	無梓	転写本	明朝綴	24.3×16.8	1	序(6), 本文(59)	天保5/ 10年	113	○	○	×	「大橋氏/隠居記」,「昭和28年1月10日付東京都立日比谷図書館蔵録印記」他	「95」	
5	静嘉堂文庫	気吹舎先生著撰書目(書題巻)	大塚平先生著撰書目	気吹舎先生著撰書目	無梓	転写本	明朝綴	26.3×18.3	1	序(6), 本文(59)	天保5/ 10年	113	○	○	×	「静嘉堂藏書」他	「507-6-20519」	
6	国立歴史民俗博物館	著述書目(書題巻)	大塚平先生著撰書目	気吹舎先生著撰書目	単辺匠 郭	清書本	明朝綴	26.5×18.3	1	序(6), 本文(59)	天保5/ 10年	119	○	○	×	「平田/氏記」	和装C-22	
7	秋田県立図書館	気吹舎先生著撰書目(書題巻)	大塚平先生著撰書目	気吹舎先生著撰書目	無梓	転写本	明朝綴	27.5×19.0	1	序(6), 本文(59)	天保5/ 10年	113	○	○	○	「秋田図/書館/書之印」	国文所「イクロ」323-46-2」,「改裝本」	
8	無窮会神智文庫	伊吹舎著述書目(書題巻,原表紙)	大塚平先生著撰書目	気吹舎先生著撰書目	無梓	清書本	明朝綴	26.5×18.5	1	序(6), 本文(59)	天保5/ 10年	113	○	○	○	「井上領国蔵」,「井上/氏」,「無窮会/神智文庫」	「14179」	

【註1】 清書本は平田塾で書写されたもの。写本によって、書目の頭の圈点の位置が、しばしば異なっている。

【註2】 歴博本の場合、丁数が2丁多く、本編の内容についても6書目多くなっている。

【註3】 「和漢図書分類日録 増加一」(宮内庁書陵部, 昭和42年3月)六頁上に「著述書目一名気吹舎先生著撰書目(省原道謙等 写)とある。

【註4】 「国書総目録」によれば、他に、京都府立総合資料館・東北大学図書館野文庫・九州大学図書館などに写本が残されている。

著述は、外部に見せるものではなかったのである。

また、羽田八幡宮文庫本の場合、下巻しか残っていないため、上巻については別の写本を見なくてはならない。東京大学文学部国文学研究室本居文庫<sup>24</sup>には、上巻・下巻揃った写本がある。奥書に「弘化二乙巳年六月廿九日記之為長」とあることから、この写本は平田塾の作成した清書本そのものではなく、転写本であろう。篤胤死去の二年後である。転写本ではあるが、上巻下巻ともに残っているためたいへん貴重なものといえる。先の羽田八幡宮文庫本（下巻）とこの本居文庫本の下巻を比較してみたところ、完全に一致していることが確認できた。従って、本居文庫本の上巻もかなり清書本に近い内容のものである可能性が高いと判断できるであろう。本稿では、下巻については羽田八幡宮文庫本、上巻については本居文庫本によって論じていくことにしたいと思う。

### 三 幕末における平田塾の版本『古道大意』刊行と 国学運動の再開

#### (1) 嘉永元年五月の版本『古道大意』の刊行

版本『古道大意』に序文を寄せているのは、秋田で医薬の業を営んでいた三沢俊秀（平田門人）である。その序文

の中で三沢は次のように述べている。

こたび<sup>①</sup>鏡胤君に議（はか）り申して、遠近<sup>②</sup>（をちこち）人の勞（いたづ）きいらずて、容易（たはやす）く拝み読べく、千万のすり本（まき）をも成してむと。堅木の板に彫（ゑ）りなして、伊吹の屋の文庫（ふみぐら）に納めまゐらせつ

この傍線①によれば、三沢が鏡胤とはかつて刊行したという。当時の鏡胤の行動を確認しておく、天保一四（一八四三年）六月四日に篤胤に会うため、鏡胤は秋田に向けて江戸を出立、六月一九日秋田に到着した<sup>26</sup>。閏九月一日篤胤が死去したが、鏡胤は同地で越年、翌弘化元年春に雪解けを待って秋田から江戸に帰還した<sup>27</sup>。つまり、この秋田滞在の約半年の間に、三沢俊秀が鏡胤に版本『古道大意』刊行を持ちかけていたのではないだろうか。また、傍線②のように、遠方にいる者も手に入りやすいように刊行するというのは、地方在住の三沢の実感であろう。三沢の序文の次に平田鏡胤の文政七年正月付の序文が綴じられているが、年記は遡ってつけられたものと考えられる。この中で、鏡胤は平田派の説く古道を「宇宙第一の正道」と説明している。

次に、『古道大意』の本文をみていきたい。写本と版本を比較してみると、【表2】のようになる。この表は両者

【表2-1】『古道大意』上巻

NO.	写 本	版 本
1	さてこゝに演説致します所ハ、古道の大意で、(1丁オモテ)	今コ、ニ演説イタシマス所ハ、古道ノ大意デ、(1丁オモテ)
2	なし	謂ユル天下ノ大道デ、則人ノ道デアル故ニ、実ニハ此ノ大御国ノ人タル者ハ、学バズトモ、其ノ大意グラキハ、心得居ベキハズノコトデゴザル。然レバ其演説ヲイタスニ、誰シノ人モ、耳ニ入ガタキハズハナキコトナレトモ(2丁ウラ～3丁オモテ)
3	それハ皇朝学ノ演説を、一席二席も聞いて、其れをかれこれいふやうな人もあるものだから、(3丁ウラ)	なし
4	古史成文にて演説致せば、其時こそ(4丁ウラ)	古道ノ奥意ヲ、古伝説ニ依テ、トツクリト演説致セバ、其時コソ(5丁オモテ)
5	なし	[水戸光圀は] 神道集成ト云ヲモ御撰ナサレ(12丁オモテ)
6	なし	[荷田東麻呂は] 我古道学ノ道紀ヲ立ラレタルハ、此人デゴザル。(14丁ウラ)
7	なし	[賀茂真淵は] 扱コノ翁、荷田ノ大人ノ門人トナリ、其ノ本志ヲ紹テ勤学イタサレタデゴザル。(14丁オモテ)
8	[本居宣長は] 則我が師とあがむる所の先生でござる(19丁ウラ)	なし
9	なし	抑中古ニ、儒仏ノ道ガ渡テヨリ以来、世人ノ心其ノ風ニ推移ツテ、古道ノ趣ハ粗略ニ成行キマシテ、次第ニ猥リガハシク、世ヲ経ルニ從テ、古ノ道ハ絶タルガコトク、足利將軍ノ、天下ノ政事ヲ執申サレマシタル頃ハ、誠ニ乱世ノ至極デ有マシタ処ガ、織田ノ信長公、豊臣ノ秀吉公、次々出サセラレテ、大キニ悪弊ヲキタメ直サシマシテ、天下ノ人略ソノ威勢ニハ服シマシタナレトモ、猶人心ハ穩ニナリマセヌ処ニ、畏クモ東照大神君、御武徳ヲ以テ天下ヲ治メサセラレ、其ノ御仁沢至ラス隈ナク、人々忠孝ノ道ヲ心得、尊卑内外ノ旨ヲモ弁ヘテ、次々古ニ復リ行ベキ中ニモ、世ヲ治メサセラルハ、ニハ、古道ヲ学ベキコト、専一ナル儀ヲ思召サレ、天下ニ命セテ、古書ヲ求メ遊バサレ、緊要ノ書等ヲバ、悉ク書写ヲ命ゼラレ、京都ニモ、江戸ニモ、駿府ニモ差置セラレタデゴザル。是ヲ御事ハ、当時ノ御記録トモヲ拝見イタセバ、明カナルコトデ、扱其ノ多ク集メサセラレタル古書トモヲバ、尾張ノ源敬公ニ御附属ナサレ、敬公是ニ依テ、神祇宝典、類聚日本紀ナド申ス書ヲ撰マセラレ、又水戸ノ源義公、其ノ御志ヲ継セラレ、有用ノ御書トモ御撰有タル御事ハ、既ニ上ニ申サガ如ク、是ヨリ世ニ弘マリ、コノ學問ニ仕ヘ奉ル人々、追々出マシタル中ニ、身ハ下ナガラ、荷田ノ宿禰羽倉ノ東瀧翁、賀茂ノ県主岡部ノ真淵翁、平ノ阿曾美本居ノ宣長翁、此三人ノ大人等、次々ニ勵ミ学バレ、其門流モ多ク、今カヤウニ真盛ト相成リ、我輩ニ至ルマデ、太平ノ御德化ヲ蒙テ、心寛ニ、古ハ学ビ仕ヘ奉ルコトト成タルハ、専東照大紙君ノ御恩願ニヨルコトト、有難シトモ、尊シトモ、称ヘ申ベキ詞モナイデゴザル。猶是等ノコトハ、別ニ委シク記シタル物ガ有マスル。今ハ彼カケテ通ルト申ス程ノコト故ニ、大略ノ中ノ、又大略ヲ申スノデゴザル。(22丁オモテ～23丁ウラ)
10		[釈迦が] 神通ト云テ、実ハ幻術ジャガ、其ノ幻術ヲ以テ人ヲ惑ハシ、(49丁ウラ)
11	なし	次ニ玉積産日神、ツギニ生産日神、ツギニ足産日神、此外ハ、大宮乃賣神、御食津神、事代主神、以上八柱ナリ(51丁オモテ)

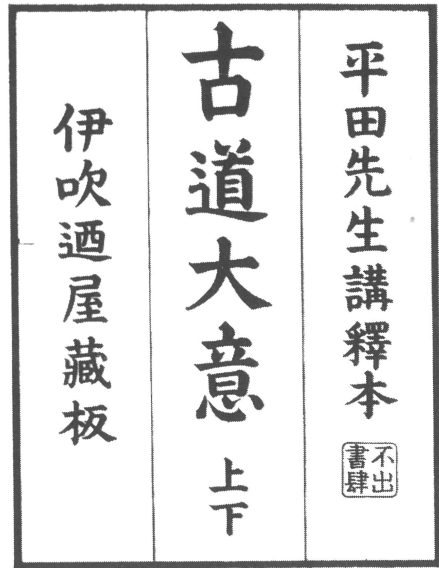
〔註〕写本上巻は、本居文庫本



【表2-2】『古道大意』下巻

NO.	写 本	版 本
1	医道の講説に、つぶさに申すつもりでござる。(10丁オモテ)	古史伝マタ、玉褌ト申スモノニ、委シク遊申シ置タデゴザル(11丁ウラ)
2	播磨や丹後の国にある所の、天の橋立がそれと見えるで、かくて天ハ上へ上りてしやんと位を定め、終に今のありさまと成た事で、かの往来したる浮橋の通ひも漸々にやミ、泉の国も此砌にきれ放れた物でござる。此事を近くたとへて申サバ、服部ノ中庸が申した通り、(13丁ウラ～14丁オモテ)	播磨や丹後ノ国ニアルノジヤト云コトデゴザル。斯テ天日ハ上ツテ、大虚空ノ真中ニ、シヤント位ヲ定メテ、外ヘハ動クトナク、一処ニ在テ、右旋リニ、クル／＼ト旋テ有ル、コレ天ツ日ノ有上ナリ。マタ大地ハ、其ノ天日ヲ中トシテ、其ヨリ遙ニ遠キ大空ヲ、右メグリニ漂ヒ行テ、大周リ一周スル、コレ一年ナリ。但シ此ノ大周ノ間ニ、自己ノ旋転アリテ、天日ニ向フ時ハ昼ヲナシ、背向ルヲリハ夜トナル、此一旋転を一日ト云フ。カクニ如クニ旋転ルコト、三百六十余転スル間ニ、大空ヲ行キ、天日ヲ大周シテ、又本ノ処ニカヘル、是ヲ一年ト云フ。扱マタ夜見ノ国モ、此ミギリニ断離レテ月ト見エ、大地ノ外ヲ周行シテ、盈虚ヲ為シ、二十九日半余ニシテ、本ノ処ニ復ル、是ヲ一月ト云フ。コレスナワハチ、大地、月夜見ノ、今ノ如ク成整ヒタルコトノ大略デゴザル。此ノ事ヲ近ク譬ヘテ申サバ、服部ノ中庸ガ申タルトホリ、(15丁オモテ～16丁オモテ)
3	なし	抑天ハ動カズ、地ノ動き旋ルト云コトハ、外国ノ説ヲ借ルニ及バズ、本ヨリ御国ノ古伝ニテ明ナルコトナレトモ、天文地理ノコトニ付テハ、西洋人ノ考ヘタル説ガ、第一ニ委ク、誰ガ聞テモ分リ易キコトユエニ、今ハ其ノ説ニ因テ云コトジヤ(36丁オモテ)
4	なし	今度カク、古道ノ大意ヲ講説スルニ付テハ、又諸道ノ旨ヲモ、大略講ゼズハ有ベカラズ。仍テ是ヨリ次々、歌道ノ大意、医道ノ大意、サテハ俗ニ謂ユル神道ノ大意、マタ外国ヨリ渡リ来タル、儒道仏道ナドノ大意ヲモ、次々講ゼントス。扱ヨリ神々ノ御巧徳、神拝ノ古法式、先驅ノ祭リカタ、惣テ世ニ在ル人ノ今日ノ心得ヲ述テ、玉褌ト名ケタル講本十卷アリ。右等ヲ見聞シテ、イヨ、倍々、我ガ古道ノ真実ニシテ、人タル者ハ必学バズハ有ルマジキ所以ヲ知弁フベシ。(67丁ウラ)

【註】写本下巻は、羽田八幡宮文庫本



【図版】大和文華館所蔵の書袋(国文学研究資料館の紙焼写真)

の相違点のうち主な箇所のみを挙げたものであるが、これによれば、版本の作成段階にかなり加筆訂正がなされていたことがわかる。幕府統治の正当性についての記述などが追加されているのだ。従来の平田国学研究では、何れも篤胤全集本(底本は版本)の『古道大意』によって篤胤生前の思想を論じてきたが、再考を要するといえる。他の篤胤講釈本の場合には、清書本と版本の内容はかなり一致するのに対して、『古道大意』の場合、入念に手を入れてから刊行しているのだ。平田塾がこの講釈本を、他の講釈本よりも重視していたことのあらわれであろう。

また、版本『古道大意』の「書袋」に注意してみたいと思<sup>28</sup>う。従来の研究では、平田塾蔵版の「書袋」はほとんど調査されることがないが、本稿ではこれに注目してみた。古道大意の場合、「不出書肆」とある(図版参照、大和文華館所蔵の書袋、国文学研究資料館のマイクロフィルム)。書肆に出さないというのである。後述するように『古道大意』の初刷は嘉永元(一八四八)年五月であるが、書肆に出さなかったのは一時的なことであったと考えられる。版本『古道大意』は、多く現存しており、門人以外の人々は書肆を通じて購入し、読んだとみられるのである。

その他の書袋の例もみておきたい。篤胤生前に刊行された『古史徴』(文政二(一八一九)年八月刊)の場合、書袋に「京江戸大坂書肆発行」とあって、三都の書肆で大々的に刊行されたという<sup>29</sup>。また、『古今妖魅考』(弘化二(一八四五)年七月刊)の書袋には「禁書肆売買」とある。『悟道弁』(文久二(一八四五年)年二月刊)の書袋の場合、「不出書肆」と記されている。なお、書袋ではないが版本『講本気吹颯』(文久二(一八四五年)年一月刊)の見返に、「不出書肆<sup>30</sup>」となっている例がある。このように平田塾の版本と一言でいっても、書肆に出す、出さないといった区別があったことがわかるであろう。但し、書肆に出さないとはいっても、『古道大意』の場合と

同様に、一時的なことであったと考えられる。書肆で、門人以外の者に実際に売られるようになる時期については、さらに調査が必要であろう。

また、平田塾の版本の刊行年（初刷）については、従来はほとんど不明であった。そもそも、平田塾蔵版のほとんどが、所謂無刊記本であるため、従来の平田国学研究では篤胤の著書の正確な刊行年がほとんど分からないままであったのである。しかし、最近、国立歴史民俗博物館の新材料によってこの問題が一挙に解決した。例えば、【表3】は、天保二年から明治元（一八六八）年までの平田塾の刊行した版本の一覧である。『古道大意』は、【表3】の通り嘉永元（一八四八）年五月刊であった。天保九（一八三八）年から弘化元（一八四四）年までの七年間、平田塾の新刊はまったくない。弘化元年から同四年の間には、唯一『古今妖魅考』（弘化二（一八四五）年七月刊）の刊行があったのみである。この間、平田塾の活動は控えめであった。しかし、『古今妖魅考』刊行から三年を経た嘉永元（一八四八）年五月以後、毎年のように新刊の版本を刊行していくことになるのだ。したがって、嘉永元（一八四八）年五月の『古道大意』の刊行は、篤胤没後における平田塾の出版活動の実質的な再開を意味していたということであろう。さらに、同二年（二月二十八日）には、文恭院（徳川家慶）の七

回忌のため幕府によって篤胤赦免がなされ、平田塾の出版活動の障害は除かれたのであった。

なお、幕末期に平田派の国学運動は隆盛を迎え、門人の急増と平田塾蔵版の著述の需要の増大となってあらわれた。そして、嘉永元（一八四八）年の『古道大意』刊行から一四年後の文久二（一八六二）年六月晦日、勅使大原重徳が篤胤全著作の学習院献納を平田側に要請してきた。同年八月一七日鍊胤は篤胤の著作を大原重徳に持参したのだ。<sup>(35)</sup> 版本『古道大意』もその中に含まれていたはずである。朝廷側が平田国学側に対して直接的な働きかけを行ったのは、これが最初である。この文久二年の一件によって、平田学派の国学運動は新たな段階を迎えたというべきであろう。

## (2) 地方門人への『古道大意』の頒布

一方、平田塾の刊行した版本『古道大意』は、地方の門人に如何に頒布され受容されたのであろうか。具体的な事例をみてみたい。例えば、相馬門人高玉宛の平田鍊胤書簡<sup>(36)</sup>（文久元年辛酉年一〇月一五日着）によれば、高玉が平田塾に注文した書籍群の中に、「古道大意 式部」が含まれていた。また、平田塾から津軽の有力門人鶴屋有節へ送られた書籍代金の覚（慶応元年二月付）によれば、「古道大意」一部の代金として銀拾四匁の請求がなされている。<sup>(37)</sup> 平

【表3】天保2年～明治元年の平田塾刊行書籍年表

書名	刊行年	西暦
大祝詞正訓	天保2年12月	1831
玉多須幾第1巻・第3巻	天保3年2月	1832
陰陽神石図	天保3年12月	1832
日女鳥考	天保4年4月	1833
顯幽御額字	天保4年4月	1833
玉禱第4巻	天保5年6月	1834
還甲御祝	天保7年6月	1836
玉禱第5巻	天保7年10月	1836
大扶桑園考	天保7年11月	1836
皇典文彙	天保8年より	1837
古今妖魅考	弘化2年7月	1845
古道大意	嘉永元年5月	1848
万声大統譜	嘉永元年5月	1848
立言文	嘉永2年4月	1849
五徳説	嘉永2年4月	1849
木匠祖神号	嘉永2年5月	1849
玉禱第6巻	嘉永2年9月	1849
赤県歴代尺図	嘉永2年	1849
再訂神拜式	嘉永4年4月	1851
再刻御略伝	嘉永4年11月	1851
玉禱第7巻	嘉永5年5月	1852
古学二千文	嘉永5年6月	1852
志都能石屋	安政元年6月	1854
天平詔詞	安政元年9月	1854
玉禱第8巻	安政2年4月	1855
神系小帖	安政2年12月	1855
八家論	安政3年6月	1856
天津祝詞考	安政3年8月	1856
玉禱第9巻	安政3年12月	1856
童蒙入学門	安政4年4月	1857
訓蒙頌	安政4年10月	1857
入学問答	安政5年3月	1858
祝詞正訓	安政5年4月	1858
大道或問	安政6年9月	1859
牛頭天王曆神弁	万延元年閏3月	1860
弘仁歴運記考	万延元年4月	1860
神系掛軸	万延元年7月	1860
俗神道大意	万延元年12月	1860
神字日文伝	文久元年5月	1861
玉禱第2巻	文久元年7月	1861
皇国度制考	文久元年12月	1861
悟道弁	文久2年3月	1862
神徳略述頌	文久2年8月	1862
気吹殿	文久2年11月	1862
出定笑語附録	文久2年12月	1862

書名	刊行年	西暦
古史伝初帙	文久3年7月	1863
古史伝第2帙	文久3年10月	1863
武神号	元治元年4月	1864
鈴屋翁真跡	元治元年4月	1864
古史伝第3帙	元治元年5月	1864
古史伝第4帙	元治元年11月	1864
鬼神新論	慶応元年3月	1865
医祖神号	慶応元年5月	1865
古史本辞経	慶応元年8月	1865
衣食住神号	慶応2年5月	1866
春秋命歴序考	慶応2年5月	1866
古史伝第5帙	慶応2年11月より	1866
皇祖宮所考	慶応2年	1866
稽古要略	慶応3年10月	1867
荷田大人啓	慶応3年	1867
古史伝第6帙	明治元年秋より	1868
太初玄運魂魄分属図説	明治元年12月	1868
葬事略記	明治元年	1868

〔註〕 歴博企画展の図録『明治維新と平田国学』参照

田塾では地方門人の求めに応じてこの版本を頒布していたのであった。平易な入門書として大いに読まれたものと思われる。その他、平田塾が頒布した版本の行方であるが、中津川の平田門人市岡殷政が林崎文庫に奉納した版本『古道大意』や、安政四（一八五七）年一月に三河門人羽田野敬雄が豊受皇大神宮文庫に奉納した版本『古道大意』が、現在、神宮文庫に所蔵されている。<sup>(38)</sup>このように版本『古道大意』の流布の実態を明らかにするためには、全国に残存する版本の悉皆調査が必要であろう。

それでは、地方在住の門人は平田塾の最新の版本について、どのように情報を得ていたのであろうか。従来の研究においても神宮文庫所蔵の「蔵板入費」（写本）は知られていたが、しかしこれは無年記である。そのため、史料としてはかなりの問題があった。しかし、最近、静嘉堂文庫において元治二（一八六五）年四月改とある「蔵板入費」（一枚摺）を偶然発見した。<sup>(39)</sup>実は、『氣吹舎先生著撰書目』（写本）の巻末に添付されていたため、従来まったく知られていなかったものである。この蔵板入費のリストに、『古道大意』の価格が記されている。さらに時期が下って、慶応元（一八六五）年二月付の「蔵板入費」（一枚摺）が国学院大学の高玉文書に所蔵されている。静嘉堂文庫のものより書目が多くなっている。『古道大意』の価格は、銀一六匁

五分であったという。その他にも、無年記の一枚摺「蔵板入費」の存在が知られている。<sup>(40)</sup>このように、平田塾では版本の価格を明記したリストを次々に作成して地方の門人に示していたのだ。門人側では、これを参考にして注文すべき書籍を選んでいたのである。

何れにしても、平田塾では嘉永元年五月から明治六（一八七三）年までの間に、『古道大意』を六二五一部刷った。平田塾蔵版の版本全体の中で一番目の数である。部数からいっても、『古道大意』の需要がかなり高かったことがわかるであろう。<sup>(41)</sup>

おわりに

以上、『古道大意』の形成と刊行に焦点を合わせること  
で、平田国学の歴史的展開の一段面について再検討してきた。最後にまとめておきたい。

篤胤は最初の公開講釈で、『古道大意』を講じた。国学の総論というべきもので、最も重要な演目であったと考えられる。篤胤の他の講釈の場合、草稿がかなり残されているのに対して、『古道大意』の場合、草稿がほとんど残っていない。何か事情があったのではないかと推測されるのである。

また、平田塾では、篤胤没後の弘化元年に『古道大意』

の清書本を作成して、門人の羽田野敬雄に頒布している。但し、「他見」を許さないなど、門人向けに限定したものであったといえる。

幕末の嘉永元年五月、平田塾は版本としてこれを刊行した。写本にかなりの加筆訂正をした上で版本として出版したのである。幕府の目を意識した加筆を行うなど、刊行には慎重であった。平田塾がこの著書を重視していたということであろう。また、書袋に「不出書肆」とあるように、版本『古道大意』は門人に限定して頒布されたのである。但し、この版本を書肆に出さなかったのは一時的なことと考えられる。

篤胤没後の弘化年間には、平田塾の活動はかなり控えめであったが、嘉永元年五月の『古道大意』刊行以後、平田塾は毎年のように新刊の版本を出版するようになる。このように『古道大意』刊行は、平田塾による出版活動の実質的な再開を意味していたのであった。篤胤の講説を直接聞くことのできない没後の門人に向けて、「宇宙第一の正道」を平易に理解させるために、特に選んで『古道大意』を刊行したということであろう。

なお、篤胤の『古道大意』は元来、幕藩体制肯定の立場から書かれている。したがって、幕末維新期の大きな社会的変革の過程で、時代状況との乖離が次第に大きくなって

いったとみられる。この近世・近代移行期に、平田門人などが実に様々な国学入門書を著したが、そこに、『古道大意』の新たな展開を窺うことができるであろう。これについては、今後の課題としたいと思う。

## 註

- (1) 村岡典嗣『宣長と篤胤』（創文社、昭和三二（一九五七）年）。
- (2) 田原嗣郎『平田篤胤』（吉川弘文館、人物叢書、昭和三八（一九六三）年）。
- (3) 子安宣邦『平田篤胤の世界』第Ⅱ部所収、ペリカン社、平成一三（二〇一〇）年。同書では「篤胤の講説の聞き手に心舎講舎における道話のような具体的な一般的聴衆を見ることは難しい」（二五四頁）としているが、この子安説は誤りである。
- (4) 渡辺金造「篤胤の著作と出版」（同『平田篤胤研究』所収、六甲書房、昭和一九（一九四四）年）、長友千代治「平田篤胤並びに門人著述の『蔵版入費』について」（『東海近世』第三号、平成二（一九九〇）年五月）。
- (5) 桂島宣弘「平田派国学者の『読書』とその言説」（『江戸の思想』五、平成八（一九九六）年一二月、ペリカン社）。
- (6) 遠藤潤「国学者と読書行為に関する一試論―相馬高玉家宛平田鍊胤書簡にみる出版・流通―」（『東京大学宗教学

研究室『東京大学宗教学年報』一九、平成一三(二〇〇一)年)。

(7) 吉田麻子「気吹舎の著述出版―新出『気吹舎日記』を中心に―」(日本近世文学会『近世文藝』七五、創立五〇周年記念号、平成一四(二〇〇二)年一月)、同「気吹舎における出版と費用」(『東洋文化』復刊第九〇号、平成一五(二〇〇三)年)、同「気吹舎日記」(『別冊太陽 知のネットワークの先駆者 平田篤胤』(平凡社、平成一六(二〇〇四)年五月)。

(8) 宮地正人「幕末平田国学と政治情報」(『日本の近世』第一八巻近代国家への志向、中央公論社、平成六(一九九四)年)。同「伊吹廼舎と四千の門弟たち」(前掲註(7)の『別冊太陽 知のネットワークの先駆者 平田篤胤』所収)。

(9) 田崎哲郎編『三河地方知識人史料』(岩田書院、平成一五(二〇〇三)年)。

(10) 樋口雄彦「伊豆における平田派国学門人の一動向―羽田直秀(富士方)宛平田鏡胤書簡の紹介から―」(『沼津市博物館紀要』一三、平成元(一九八九)年)。

(11) 沼田哲「鶴屋有節宛平田鏡胤書簡四通をめぐって」(『国史研究』第一〇〇号、弘前大学国史研究会編、平成八(一九九六)年三月)。同「平田派にみる活動と転換」(『幕末学のみかた』所収、朝日新聞社、平成一〇(一九九八)年)もある。

(12) 芳賀登「平田鏡胤の党活動と情報宣伝文化活動」(『芳賀登著作選集第五巻 平田篤胤の学問と思想』に所収、雄山閣、平成一四(二〇〇二)年)がある。

(13) 国立歴史民俗博物館企画展の図録『明治維新と平田国学』(平成一六(二〇〇四)年九月)を参照。

(14) 『大壑君御一代略記』(版本『玉櫛』巻一〇に合綴)、大和文華館鈴鹿文庫所蔵本(国文学研究資料館所蔵の紙焼写真「03250」)。

(15) 国立歴史民俗博物館の平田家資料に、古道大意の跋文とみられるものが一葉含まれている。書簡第18袋「二一―二一〇」の包紙の裏側。

(16) 講釈の広告文「御国学講談」、前掲載註(13)の図録『明治維新と平田国学』五五頁を参照。

(17) 講釈の「表会」と「内会」については、「篤胤ガ負気ナクモ古道ノ大意ヨリ次次、医道マデノ表会ヲ立置テ、演説イタシタル趣ヲ、トツクリト御聞ノ上、ツブサニ御会得アツテ、ナホ厚ク古ヘノ道ヲ信ゼラレテ、各々名簿ヲ投ゼラレ、斯ヤウニ内会マデモ出席サル、コト、」(版本『気吹胤』下)という記述を参照。

(18) 「内書」「外書」の区別については、拙稿「平田篤胤の『靈能真柱』の形成と刊行」(『鈴屋学会報』二〇号)で一度言及した。

(19) 前掲註(9)の三八頁の文政一〇年八月七日付羽田野敬

雄宛平田篤胤書簡、などを参照。

(20) 弘化二(一八四五)年四月一五日付「著述書写本目錄并書筆紙料覚」、岡山手紙を読む会編『書簡研究』五(平成五(一九九三年一月)の九六―九七頁参照。このリストは、弘化二年四月一五日付で門人業合大枝宛平田鏡胤書簡に添付されたもの。

(21) 青森県立郷土館所蔵の「著述書写本目錄并筆紙料覚」(青森県史編さん近世部会編『青森県史資料編近世』学芸編、平成一六年三月、青森県発刊)六〇六―六〇七頁。

(22) 国立歴史民俗博物館所蔵の「著述書目」、請求記号「和装C―22」、印記「平田／氏記」。

(23) 豊橋市中央図書館の羽田八幡宮文庫所蔵、請求記号「二二・二二―二八」、灰色表紙、書題簽「古道大意」下、半紙本、明朝綴、二四・三×一六・七糎、墨付六一丁、半葉一〇行、印記「羽田／埜氏」「幡太文庫」「栄樹園」「豊橋市立／図書館印」。

(24) 東京大学文学部国文学研究室所蔵本居文庫(国文学研究資料館所蔵のマイクロフィルム「四六一―四九一」参照)、書題簽「古道大意」、内題「古道大意」、筆者名の記述なし、半紙本、無裱、明朝綴、奥書「弘化二乙巳年六月廿九日記之 為長」

(25) 三沢俊秀、(姓)布川・小沢、秋田の人。布川謙斎の男。字は俊秀。父の郷地を以て姓とし、医及び薬業を営む。

天保一二年二月二日入門して、国学を平田篤胤に学ぶ。また鏡胤と交り結び、嘉永二年八月二〇年卒、享年三二。

布川銀海祖父。以上は、『秋田人名大事典』三五六頁、『和学者総覧』六七六頁、桐原善雄『平田篤胤と秋田乃門人』(文芸社、平成一三(二〇〇一)年)を参照。

(26) 前掲註(7)『別冊太陽 知のネットワークの先駆者 平田篤胤』の吉田麻子「平田篤胤年譜」参照。

(27) 伊藤裕『大壑平田篤胤伝』(錦正社、昭和四八(一九七三)年)二八四頁。

(28) 平田塾の版本の書袋については、前掲註(18)の拙稿「平田篤胤の『靈能真柱』の形成と刊行」を参照。

(29) 『古史徴』の書袋は、無窮会神習文庫所蔵、番号「四二」。

(30) 『古今妖魅考』の書袋は、蓬左文庫所蔵本(国文学研究資料館マイクロフィルム「四八―四五九―一」)。

(31) 『悟道弁』の書袋は、無窮会神習文庫所蔵、番号「八二九九」。

(32) 『出定笑語附録』の書袋は、無窮会神習文庫所蔵本、番号「八三二一」。

(33) 『講本気吹颯』の見返は、岩瀬文庫所蔵本(国文学研究資料館のマイクロフィルム「二二四―一九六一」)を参照。蔵書印「平田／氏記」が確認できるから、元来平田家の蔵書であったとみられる。



(34) 前掲(13)の図録『明治維新と平田国学』の平田塾刊本目録参照。

(35) 前掲註(7)の『別冊太陽 知のネットワークの先駆者 平田篤胤』の吉田麻子「平田篤胤年譜」参照。

(36) 高玉宛平田鏡胤書簡〔文久元年辛酉年十月十五日着〕(「相馬地方における平田鏡胤書簡(Ⅲ)」三六九―三七一頁、『国学院大学日本文化研究所紀要』九〇)。

(37) 前掲註(21)の『青森県史 資料編近世 学芸編』六一三―六一四頁に、「古道大意 巻 同拾四匁」とある。

(38) ①神宮文庫本の『古道大意』(国文学研究資料館マイクロフィルム「三四―四八五」)の上・下それぞれの見返に、墨書で「美濃恵奈郡中津川宿／市岡長右衛門殿政／納上」とある。印記「林崎／文庫」「林崎文庫」。②神宮文庫の『古道大意』(国文学研究資料館マイクロフィルム「三四―四八四―一八」)の下巻の裏表紙見返に「奉納／豊受皇大神宮御文庫／安政四年丁巳十二月／三河国渥美郡吉田方郷羽田邑神明八幡両宮神主 羽田埜常陸敬雄(花押)」とある。印記「神宮／文庫」「宮崎／文庫」。その他、神宮文庫所蔵『古道大意』(国文学研究資料館マイクロフィルム「三四―四八四―一九」)には、「蔵書印「平田／氏記」と押印されている。平田家から流れたものであろう。

(39) 静嘉堂文庫所蔵の「蔵板入費」(一枚摺、元治二(一八六五)年四月改)であるが、『氣吹舎先生著撰書目』(五〇

七一六―二〇五一九)の巻末貼付の摺物である。この史料によれば、古道大意の価格は「同十四匁」となっていて、金十四匁であったという。しかし、実際には銀十四匁の可能性がある。詳しくは、別稿であらためて論じたい。

(40) 国学院大学所蔵高玉文書の「蔵板入費」については、松本久史の口頭発表「平田派国学者の出版目録について」のレジユメ(平成一六(二〇〇四)年八月四日於国学院大学常盤松二号館大会議室、第三回国学研究会)。

(41) その他、無年記の「蔵板入費」は、前掲註(5)の長友所蔵の一枚摺「蔵板入費」や、河野省三『平田篤胤』(新伝記叢書、新潮社、昭和一八(一九四三)年)一六九頁に掲載された一枚摺「蔵板入費」がある。

(42) 前掲註(13)の図録『明治維新と平田国学』三九頁参照。

(国立歴史民俗博物館研究協力者)